

児童英語教育で扱われる機能語*

町田 なほみ

神田外語大学

小学校英語活動では、「コミュニケーション能力の素地の育成」を目標として掲げているにも係わらず、文や句を作る際に不可欠な要素である機能語に関する研究はほとんど進められていない。本稿は、児童英語教育で扱われる国内外の教材に出現する機能語の種類と教材間の重複度を分析した上で、それらの用法から導入される句・文レベルでの表現と児童英語教育で扱われるコミュニケーションの形を探ろうとするものである。そして、本調査の結果を小学校英語教育で掲げられた目標遂行のためにどのように活用できうるか論じ、今後の英語活動をより有意義なものとするための基礎資料の一つとなることを目指す。

1. はじめに

2011年からの公立小学校における英語活動では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(中略)コミュニケーション能力の素地を養う」(文部科学省、2008)ことを目標としているが、英語活動の多くはトピックやタスクに基づき行われ、これらの内容に即した内容語、主に名詞の音声によるインプットとアウトプットに焦点があてられている。活動中に導入される質問や返答などの表現一句や文レベルでの表現は、それぞれの機能、つまり文法を意

* 本稿は2010年11月13日に行われた日本英語学会第28回大会(於:日本大学文理学部キャンパス)におけるワークショップ「英語学から見た児童英語」(長谷川信子、神谷昇、長谷部郁子との共同発表)での筆者の発表「児童英語教育で扱われる機能語」を基に加筆・修正を行ったものである。ワークショップで貴重なコメントを下された参加者の方々には厚く御礼申し上げます。また言うまでもなく、本稿の誤りは全て筆者の責任である。

識させることなくチャンクとして扱い、単語レベルの活動を通して英語に慣れることを目指しているのが実態である。

公立小学校の英語活動での目標を「英語という言語に音声を通して慣れること」の側面だけとらえれば、句や文レベルの表現の機能や文法を児童に理解させる必要は全くないだろうが、より広く、そして深く「コミュニケーション能力」をとらえるならば、表現の持つ機能や文法への理解なくしてこの能力が真に養われるかとの疑問が自ずと湧いてくる。

長谷川他（2009）は、この実態に対して、名詞のような内容語のみでもある程度のコミュニケーションは可能であるとしながらも、さらに一步進んだ言語活動を行うためには文法は不可欠であるとの指摘をしている。

母語での文法習得途上の児童に対し、英語での表現の機能や文法を理解させることや、これらを教えることなく児童自らによる「気づき」を求めるのは難しいことであろう。しかしながら、文部科学省の掲げる目的を遂行するならば、導入する表現にどのような機能を果たす語が出現しているかという文法的観点からの理解を深めることは、この活動に係わる指導者が、どのような表現をどのような順序で導入するかを考え、教室内活動を運営する上で有益な知識となるであろう。

本稿は、児童英語教育で使用される国内外の教材に出現する語彙のうち、コミュニケーションを根本から支える機能語に焦点をあて、それらの種類と重複度を調査し報告する。その上で、これらの教材で導入されている句や文レベルの表現の特徴をとらえ、児童英語教育で扱われるコミュニケーションの形を明らかにしようとするものである。さらに、扱う機能語のうち前置詞については、教材内での用法を意味の観点からも調査、分析し報告する。

以下、第2章では児童英語教育の研究の背景を概観し、第3章で研究の目的、第4章では本研究で扱う言語資料と調査

方法、第5章で機能語全般の出現の種類と重複度の分析結果を報告する。さらに第6章では、前置詞を意味の観点からも分析し、その結果を実例と併せて報告し、最後にまとめと今後の研究課題を論じる。

2. 研究の背景

児童英語教育は、タスクやトピックを基にこれらに関連する名詞を主とした内容語を中心に教室内活動が行われている実態を反映し、語彙に関する研究が様々な研究者により進められている。

その代表的なものとして、石川（2006）、中條他（2006）、長谷川・町田（2010）が挙げられ、これらの研究は、*a, the* などを含めた一般的な観点からの機能語も分析の対象としているが、実態に即して内容語に焦点をあてた語彙研究である。さらに、これらは主に頻度により語彙をリスト化する手法を用い、それぞれの語彙の用法、つまりどのような文脈で語彙が使用されているかという点に関する配慮は長谷川・町田（2010）の研究のみである。

語彙を中心にすえた英語活動にとって、これらの研究は導入する語の選択において非常に有用である。しかしながら、2011年からの公立小学校での英語活動に対しては、「コミュニケーション能力」に関して明確に言及しており、現在の活動のように単語レベルでの活動を主としていては、真の意味での目標遂行は容易なものではないように思われる。

なぜなら人間の言語活動は、内容語だけでは当然限界があり、コミュニケーションを円滑に図るには、ある程度のレベルの文が必要となるからである。そのためには、句や文を作るために不可欠である機能語に対して、これまでとは異なるアプローチでの研究を行うことは意義深く、その成果はコミュニケーション能力育成の助けとなり、指導要領で掲げられ

た目標の遂行を支援するための基礎的資料となりうると考える。

3. 研究の目的

本研究での調査は、児童英語教育教材に出現する機能語¹の種類と重複度を明らかにし、それらが使用される句や文がどのようなものであるか理解した上で、コミュニケーションの形を探ることを目的とするので、

1. 児童英語用教材にはどのような機能語が出現し、どの語が重複するか。
2. 国内と海外の児童英語用教育教材に出現する機能語には差異があるか。
3. それぞれの機能語はどのように使用されているか。

の3点を調査する。

4. 言語資料と調査方法

4.1. 言語資料

本研究で扱った言語資料は、いずれも児童用英語教材で、日本国内の教材は以下の通り、文部科学省が全国の公立小学校に配布した『英語ノート』に加え、中学校英語検定教科書の出版社により児童向け英語教材として出版されたもののうち入手可能な4種を対象とした。

『英語ノート』：book 1・2＋指導書内のCDスクリプト

Let's Have Fun!：book1～6

Junior Columbus 21：book 1・2

One World Kids：アント・バードコース＋指導書の一部

¹ 本稿における「機能語」とは、語と語をつなげる働きをし、文や句を作る際に必要不可欠な要素で内容語より意味が希薄で数も限定されるものと定義し、接続詞・疑問詞・助動詞・前置詞を意味する。

さらに、海外では児童のための英語教育に対する研究や教材開発が日本に比べはるかに進んでいることから、現在の日本国内教材の特徴をより明確にするために、以下の海外にて出版されたコースブック 2 種も分析の対象とした。今後の日本での児童英語活動の方向性を模索する中で海外の教材分析も同時に行うことは、有益な情報を得られると考えたためである。

Let's Go (2nd ed.) : Starter～6

SuperKids (New ed.) : 1～6

これら 2 種は、イギリスを本拠とする出版社から出版され、世界各国に広く流通しているコースブックである。アメリカでは ESL、つまり英語を第二言語として学ぶ研究が中心である一方、イギリスでは英語を外国語として学ぶ、つまり EFL としての英語教育への研究が盛んであり、児童用教材にもその知見が十分に盛り込まれている。また、EFL という視点からゆえ、日本人学習者への配慮が盛り込まれており、対象資料として適切であると考え選択した。

4.2. 調査手順

上記 6 種の国内外の言語資料は、中條他（2006）での手法と同様、各資料にどのような機能語が出現するか、資料間でどの程度重複するか、を基本的な分析手法とした。また、それぞれの語の用法にも着目し、使用されている句や文の形を検証した。さらに前置詞は、意味の観点からも分析を行い、その用法を明らかにする試みを行った。

5. 分析結果

5.1. 接続詞

接続詞は、表 1 の通り、先の言語資料中に 13 種が出現し、全

ての資料に重複して出現した接続詞は **and** と **but** のみであった。また、日本国内の資料中の出現種類よりも海外の出現種類が全般的に多いことが明らかとなった。

(表 1) 接続詞の出現と重複

接続詞	言語資料名*					
	ノート	Fun	JC21	OWK	Ox.	Long.
and	○	○	○	○	○	○
but	○	○	○	○	○	○
or		○	○		○	○
if		○	○		○	○
when	○	○			○	○
because		○			○	○
than			○		○	○
that	○	○		○		
before					○	○
until			○			○
after					○	
as		○				
since					○	

*言語資料名は略称により表記

ノート: 『英語ノート』 Fun: *Let's Have Fun!* JC21: *Junior Columbus 21*
OWK: *One World Kids* Ox.: *Let's Go (2nd ed.)* Long.: *SuperKids (New ed.)*

さらにこれらが含まれる句や文を分析したところ、等位接続詞 **and**, **but** は全資料に重複して出現しているが、その用法には多少の異なりが見られた。等位接続詞には語同士・句同士を結ぶ役割と、文同士を結ぶ役割があるが、**and** は日本国内の資料中では、語や句同士の結合が文同士の結合よりはるかに多くなっている。一方、海外の資料では、語や句同士の結合が文同士の結合よりもやや多い程度であった。しかし、国内外を問わずどちらの資料でも、文同士の結合はレベルが進んでから出現することが分析結果として得られ、**and** については、語同士・句同士の結合から文同士の結合に移行する

傾向があることが明らかとなった。

これに対して、**but** は同じ等位接続詞でありながら、文同士を結合させる用法のみでの出現であった。**and** の用例の傾向から分かる様に、文同士の結合は児童にとって困難と考えられるため、**but** は全ての教材に出現するものの、出現頻度ははるかに少なく、かつレベルが上がってからしか出現しない。

重複度が中程度の接続詞は **or, if, when, because** であり、これらは、後述の疑問詞 **which** や **why** の出現の有無に影響を受けているものと考えられる。またこれらの従属接続詞は、文同士を結ぶことに主従の関係が加わった複文構造をとるため児童には困難であり、重複度が下がっている可能性が推測できる。さらに重複度が低い **before, until** などは、いずれも時に関連する接続詞であり、**after, since** はさらに重複度が下がっている。よって、文同士の結合にさらなる文法事項が加わる接続詞は重複度が低くなることが明らかとなった。

5.2. 疑問詞

疑問詞は、国内外の言語資料中 8 種が出現し、その内 **what, who, where, how** の 4 種は全ての資料に出現したものの、出現の有無は資料により多少の異なりが生じた。また疑問詞に関しても、接続詞同様海外の資料により多くの種類の出現が見られた (表 2)。

(表 2) 疑問詞の出現と重複

疑問詞	言語資料名					
	ノート	Fun	JC21	OWK	Ox.	Long.
what	○	○	○	○	○	○
who	○	○	○	○	○	○
where	○	○	○	○	○	○
how	○	○	○	○	○	○
when	○	○	○		○	○
which		○	○		○	○
whose		○			○	○
why					○	○

これらの重複度が高い4種の疑問詞は、いずれも眼前の対象物に対して質問をする際に多用される疑問詞であるという共通点が見られる。さらに4種中 what や how は、What is this? や How many~? などの定型的な用法が、いずれの資料でも用例として多出しているという共通点が見られた。

一方、when は、接続詞の重複度の差に影響を与える要素としても挙げたが、時の要素が関係していること、which は、接続詞 or の出現の有無に影響を受けることから重複度が下がったと考えられる。また、whose は主名詞との結合が必要なための困難さ、why は because との出現の有無の影響が、重複度の低さに関係している可能性が考えられる。

疑問詞も接続詞同様、文法事項が複雑になるほど重複度が下がる傾向が顕著であり、定型的表現として導入可能なものはどの資料でも出現することが結果として得られた。

5.3. 助動詞

助動詞は、表3が示す様に接続詞、疑問詞に比べ言語資料の違いで出現する種類が大きく異なることが見てとれる。そして、12種の助動詞が出現するものの、ほとんどの国内の資料ではごく限られた助動詞しか出現していないことが分かる。

さらに、12 種もの助動詞が出現するにもかかわらず、全資料に重複するのは **can** のみであった。

(表 3) 助動詞の出現と重複

助動詞	言語資料名					
	ノート	Fun	JC21	OWK	Ox.	Long.
can	○	○	○	○	○	○
will		○	○	○	○	○
would	○	○		○	○	
may		○		○		○
have to			○		○	○
must		○			○	
be going to					○	○
could					○	○
should					○	○
might						○
need					○	
shall		○				

この様に **can** が唯一重複した助動詞である要因として、これが自己の活動を表現する時に使用しやすい助動詞であることが考えられる。**will** も同様の特徴を持つが、時に関連する要素を含み、眼前の事象を離れた表現に用いるという難しさのため、わずかながら重複度が下がった可能性がある。

中程度の重複度の助動詞としては **would, may** があるが、これらはいずれの資料においても **would like to** や **May I** の様な定型的表現の一部としての使用が大部分で、*Let's Go* (2nd ed.) のレベルが進んだコースブック内に仮定法の用例として一部出現しているのみである。つまりこれらの助動詞は、単独の使用となると他の助動詞同様、出現度は非常に低くなる。

また、重複度の低い **could, should, be going to** などの助動詞が、国内の資料に全く出現しないのは非常に特徴的で興味深

い結果である。should のような命令的要素を含む助動詞は、相手への働きかけを要求するため自己表現中心の児童の英語活動では難しさを伴い、be going to は国内の児童英語教材では同じ時制を will により導入するためだと思われる。国内と海外の資料での助動詞の種類の違いは、コミュニケーションの形の違いを明白にし、導入の順序のヒントを与えてくれる貴重な情報となるであろう。

5.4. 前置詞

前置詞は、資料により出現の種類は様々で 35 種類²にも及んだが、これは、児童英語教育の活動がトピックやタスク中心に行われていることに大きく影響を受けているためであろう。また、他の機能語同様、国内の資料に比べ海外の資料にその多さが顕著である。35 種中、全ての資料に出現する前置詞はわずか 5 種であり、6 種の資料中 5 種の前置詞を合わせても 11 種に留まる。

以下表 4 に重複度の高い 11 種の前置詞の分析結果を示す。

² 6 種の言語資料に出現した前置詞 35 種中、表 4 に掲載されていない 24 種の前置詞は稿末の資料 1 を参考にされたい。

(表 4) 前置詞の出現と重複 (重複度 5 種以上)

前置詞	言語資料名					
	ノート	Fun	JC21	OWK	Ox.	Long.
on	○	○	○	○	○	○
in	○	○	○	○	○	○
at	○	○	○	○	○	○
from	○	○	○	○	○	○
to	○	○	○	○	○	○
about		○	○	○	○	○
after		○	○	○	○	○
by		○	○	○	○	○
for		○	○	○	○	○
of		○	○	○	○	○
with	○	○	○		○	○

表 4 から分かるように重複度が高い前置詞は基本的なものばかりで、全般的に資料中の頻度も高く、重複度が下がるに従いそれぞれの頻度も下がっていく傾向が見られた。

この様に多様な前置詞が出現する中で、全ての資料に重複する前置詞はわずか 5 種であるが、前置詞は用法によって異なる意味を表すという特徴を持っているので、児童英語においては単純に 5 種ととらえることは果たして妥当なのであろうか。

例えば、on the table と on foot で用いられる on は明らかに異なる意味であり、これらを単に同じ綴りであるがゆえ同じ語とすることには疑問を感じる。むしろ児童英語では 2 種の on と区別する方が、より自然なとらえ方であるように思われるので、前置詞に関しては用例から意味を分析し、どのように用いられることが多いのかを探らねば、前置詞の特徴を明らかにしたとは言い難いであろう。

よって次章では、これら重複度の高い前置詞の中から全ての言語資料に重複した 5 種の前置詞に関して用例を分析し、

それぞれの意味を検証した結果を報告する。

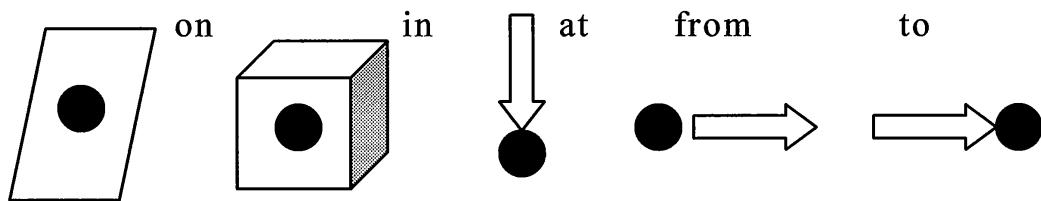
6. 前置詞 5 種 : on, in, at, from, to の意味分析

6.1. 前置詞 5 種の基本的意味と調査方法

前置詞を機能語として扱うことについては議論の余地はあるが、本稿では前置詞が内容語と機能語の両方の特性を持ち合わせ、数が限定されているとの観点から、他の機能語同様の分析を第 5 章 4 項にて行った。さらに、内容語よりも希薄ではあるが意味を持つことを鑑み、前述の言語資料に重複する前置詞がどのような意味で使用されているかに関して分析を行った。

重複する 5 種の前置詞のスキーマは下記の通り、全て場に関係しており、on, in at はいずれも名詞の位置する場所、つまり空間に対してどの位置にあるかを示す役割を果たし、接触しているか、中にあるか、ある一点かという点で異なっており、それぞれがプロトタイプであると言える。

また、from と to は、場だけでなく時とも関連し、それぞれ、起点と到達を前提とした方向を意味することがプロトタイプだと言える。



参考：浅羽（2008），松永・河原（2006）

本稿では全ての言語資料に重複した前置詞が、スキーマで示したプロトタイプの意味を持ってどの程度出現するか、またそこから発展した意味を持った用法が出現するか、その出現度はどの程度かを分析した。

6.2. 前置詞 5 種の意味分析結果

前置詞 5 種は、言語資料中にかなりの数出現しており、それぞれの前置詞の総出現数とその基本的な意味に加えて、プロトタイプの意味での用例、プロトタイプから発展した意味(比喩的意味)での用例、その他の用例に分類し、それぞれに出現数を付したものが表 5 である。

(表 5) 前置詞 5 種の意味分析結果³

総出現数と意味	意味詳細分類	出現数
on (390 例) 基本的意味：接触	物理的接触	209 例
	比喩的接触	110 例
	目標物・目的に対する接触	60 例
	その他	11 例
in (1129 例) 基本的意味：「～の中に」	場所(服装を含む)	892 例
	比喩的场所	225 例
	その他	12 例
at (322 例) 基本的意味：場所の一点	場・時の一点	303 例
	比喩的場の一点(領域)	17 例
	その他	2 例
from (161 例) 基本的意味：起点	起点	121 例
	比喩的起点	38 例
	その他	2 例
to (633 例) 基本的意味：到達前提の方向	方向	507 例
	到達点	36 例
	比喩的方向・到達点	82 例
	その他	8 例

表 5 が示すように全ての言語資料に重複する前置詞 5 種は、いずれもプロトタイプとしての意味、もしくは比喩的な意味で使用されていることが明確に示された。

それぞれの前置詞にプロトタイプから離れた用例がわずか

³ それぞれの前置詞の用例は稿末の資料 2 を参考にされたい。

ながら見られたが、その大半は、前置詞が文脈なしに単独で導入されているために意味を明らかにできないものである。例外として、on に手段を意味する 1 例のみ、at に at all の定型的表現の一部としての 2 例のみ、to に目的を意味する 7 例と比較を意味する 1 例のみが出現するだけであった。

このように、児童英語教育用教材における前置詞は、基本的意味から非常に外れた意味、拡張をして使用される例は全くない、もしくは非常に稀であり、基本的意味－プロトタイプか、もしくはこれに非常に近い形、つまり比喩的な解釈をした意味での用例によって導入されていることが明らかとなった。そして、さらに用例を基本的意味か比喩の意味かの観点で国内外の言語資料で比較した場合、国内の教材では比喩的な用例ではなく、基本的な意味での使用が非常に多いことも結果として得られた。

国内の資料中のそれぞれの前置詞が基本的な意味で使用されている傾向は、前置詞をより自然な状況での言語活動の中で導入しようとするためだと考えられる。一方、海外資料中の用例に基本的意味ではないものが含まれるという傾向は、異なる意味を持つ前置詞の導入で、より高度な文をインプットさせようという試みが見てとれる。これは、海外資料の高いレベルのコースブックに出現していることに裏付けられ、前置詞も文を複雑にするための構成要素であることに十分な配慮がなされていることを示していると考えられる。

7. おわりに

本研究では、これまでの研究ではあまり着目されてこなかった機能語の種類と教材間の重複度を国内外の児童用英語教材を対象に分析し、その結果からいくつかの特徴をとらえることができた。

まず、機能語は教材によって出現する種類に異なりを見せ

たが、助動詞はわずか1語のみではあったものの、一定の重複する機能語を抽出するに至った。

Rixon (1999) は、児童用英語教材はテーマやトピックにより、導入される語彙が影響を受けるため、その重複度は小さいと報告している。確かに本研究での結果において重複度は大きいとは言い難いが、数が限定されている機能語において、一定の重複度を持つ語を理解できたと言えよう。つまり、重複した機能語は核となる語と考えられ、句や文レベルでのコミュニケーションを目指す際に大いに活用できる情報が得られたと思われる。そして、これらの情報は、重複度の差から使用の難易度をある程度推測することを可能とし、導入の順序を考慮する際の貴重な基礎資料ともなりうるであろう。

また、国内外の児童英語教育教材を対象としたことにより、国内の教材中で導入される機能語に比べ、海外のそれは多岐に渡っていることが明確となった。しかし、出現する機能語の種類の高さは、海外の教材においてもレベルが進んでからであり、それ以前のレベルでは、国内外に重複する機能語が多いことを理解できた。

さらに、それぞれの機能語の使用は、非常に基本的なものに限定されていることも明らかとなった。接続詞、疑問詞、助動詞は、複数の文法事項が含まれず、眼前の対象物や自己の活動を表現しやすいものが教材間に重複して出現している。この傾向を指導者が十分考慮し、導入の順序を模索すれば、自然な段階をふんで「コミュニケーション能力の素地の育成」を成功に導くことが可能となるかもしれない。もしくは、自然な流れに沿った機能語導入により、児童による「気づき」を促進する可能性も大きくなると期待できる。

また、前置詞は高い重複度を示したものの、ほとんどが基本的意味、もしくは比喩的意味での使用であった。よって、導入の際にはこれらの意味から離れない句や文を利用すると

自然なコミュニケーションを行う助けになるであろう。

本研究では、出現の種類と重複度を探ることを第一義とし、一部の高い重複度の機能語しか用法の分析を行っていないため、重複度が中程度の機能語に関しては、その特徴を把握しきれていないものもある。例えば、接続詞 *or* と *when* は重複度が 6 種中 4 種ではあるが、教材内の用法を全て検証してみれば、この 2 つの接続詞の出現頻度などから難易度を推測可能とする何らかの情報が得られるかもしれない。

今後の研究への課題として、重複度のみでなく、詳細に用例の頻度や文法要素を追求することが、児童英語教育教材に導入される機能語の特徴をさらに明らかにするために必要であろう。

また、文部科学省は、平成 24 年度から現在使用の『英語ノート』に代わり、指導する中で出てきた課題を改定すべく新たに編集された *Hi! Friends* の使用を発表している。英語活動への取り組みも本格化し、様々な教材が近年、そして今後も開発・出版される可能性は大であり、日本国内の教材もこれまでの研究や実践経験を反映して多様性に富むと推測できる。つまり、日本における英語活動の中でのコミュニケーションの形は、より良いものを目指すために改定が重ねられ変化を続けている。今後も同様の分析を継続し、コミュニケーションの形を探求することは、さらに効果的な英語活動の運営と目標遂行のために大きな役割を果たすと思われる。

参考文献

- 浅羽克彦 (2008) . 東大生が書いたつながる英文法 一週間で中学英語総ざらい, ディスカバー・トゥエンティワン.
中條清美, 西垣知佳子, 西岡菜穂子, 山崎淳史, 白井篤義 (2006). 「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学

- 部研究報告 B』 39, pp. 79-109. 日本大学.
- 長谷川信子, 神谷昇, 町田なほみ, 長谷部郁子 (2009). 「小学校英語活動における「英語のカタチ」－『英語ノート』出現語彙の分析結果から－」, 第9回小学校英語教育学会 (JES) 東京大会 (於東京学芸大学) での口頭発表, 2009年7月19日.
- 長谷川信子, 町田なほみ (2010). 「児童英語の語彙リスト－『KUIS 語彙リスト500』の開発過程とその全容－」, *Scientific Approaches to Language* 9, pp. 149-190. 神田外語大学.
- 石川慎一郎 (2006). 「KUBEE1850」, 神戸大学.
<http://language.Sakura.ne.jp/s/kubee.html>
- 松永暢史, 河原清志 (2006). 「絵で英文法」. ワニブックス.
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領』 (平成20年3月)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm
- Rixon, S. (1999). Where Do the Words in EYL Textbooks Come From? In Rixon, S. (Ed.), *Young Learners of English: Some Research Perspectives*, pp.55-71. Essex: Pearson.

言語資料

- 『英語ノート』 1, 2. (2009). 文部科学省.
- 『英語ノート指導資料』 1, 2. (2009). 文部科学省.
- Let's Have Fun!* 1～6. (2002). 開隆堂.
- Junior Columbus 21* 1, 2. (2004). 光村図書.
- One World Kids* アント・バード. (2001). 教育出版.
- One World Kids* 教師用指導書ティーチャーズブック アント・バード. (2001). 教育出版.
- Let's Go (2nd ed.)* Starter～6. (2000). Oxford: Oxford University Press.
- SuperKids (New ed.)*: 1～6. (2005). Hong Kong: Longman Asia EFLT.

資料 1 : 重複度の低い前置詞*

前置詞	言語資料名					
	ノート	Fun	JC21	OWK	Ox.	Long.
as		○	○		○	○
like			○	○	○	○
over		○	○	○	○	
under		○	○		○	○
around			○		○	○
before		○	○		○	
down		○		○		○
into			○		○	○
onto			○		○	○
through		○	○		○	
above			○			○
behind					○	○
between			○			○
near			○		○	
per			○			○
along					○	
beside		○				
during					○	
past		○				
round					○	
since				○		
up				○		
upon		○				
without					○	

*本別表には表 4 に記した重複度の高い(6種の言語資料の内5種に出現)前置詞 11 種以外の 24 種の前置詞を掲載した。

資料 2 : 前置詞の意味別用例

前置詞	意味分類詳細	用例	言語資料	
on	物理的接触	I want to walk on the moon. It's on the second floor.	ノート・2 OWK・アメント	
	比喩的接触	I study Japanese on Monday.	ノート・1	
	目標物・目的に対する接触	Beth is on her way to France. ~ check on the Internet.	Ox.・5 JC21・bk2	
		How about the bar on the left?	JC21・bk2	
	その他(手段)	I go to school on foot. I work in a hospital.	OWK・アメント ノート・2	
in	場所(服装含む)	They live in the river. That's my mother in the long skirt.	JC21・bk2 Ox.・5	
	比喩的場所	Christmas is in December. I'm in 4 th grade.	ノート・2 JC21・bk1	
	その他	単語での用例のみ		
		I study at school.	ノート・2	
		I get up at six. Look at this.	ノート・2 ノート・2	
at	場・時の一点			
	比喩的場の一点(領域)	I'm good at cooking.	OWK・アメント	
	その他(定型的)	When you're down and out, there seems no hope at all. I couldn't understand him at all.	LHF・6 Ox.・6	

from	起点	I'm from Japan.	ノート・1
	比喩的起点	The hour of the cow is from one a.m. to three a.m.	JC21・bk2
		Tofu is made from soybean.	JC21・bk2
		Let's point and count from one to ten.	JC21・bk1
その他	Try to guess the meaning from the story. 単語での用例のみ	Ox.・6	
to	方向	I go to school by bus.	OWK・アセント
	到達点	Happy birthday to you.	ノート・2
		Sunday to Saturday is one week.	JC21・bk2
	比喩的方向・到達点	Let's listen to Mr. Shu!	LHF・2
		It's next to China.	JC21・bk2
	その他（目的）	Last week Beth and her family went to a picnic.	Ox.・5
		To go to summer camp.	Long.・6
	その他（比較）	The Tigers and the Bears were tied three to three.	Ox.・6

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

nahomijp@kanda.kuis.ac.jp